平成 16 年 8 月 26 日
＜学校教育専修　佐々木　朗＞

さらば哀しみのドラッグ　～NO と言える勇気を持とう

講師　横浜市立総合高校　水谷　修先生

8 月 25 日、水谷先生が函館に見えるということで、夜６時半からの函館工業高校定時制講演会に参加してきました。生徒達に加え、一般席にも、各学校の先生方、PTA の姿も見かけました。また、生徒会長の話は予め用意した原稿を読むのではなく、率直な感想を述べてくれたのも感動的しました。

14 年前に普通高校から、定時制高校に移り、青少年の非行を食い止めるため、職場で、そして夜の街で、先生は活躍されている。またの名前を「夜回り先生」と暴走族に名づけられたエピソードも語って下さいました。

タカシ
10 年前に、殺人をしてしまったタカシ。彼は心が優秀であった。白い杖をついているおばあちゃんがいるとつえと反対の手で手を取ってあげる。お年寄りが重いものを持っていると運んであげる。彼は父子家庭であった。高校生で暴走族に入った。学校は６月、７月９月は、全く登校しない。水谷先生は、タカシが高校に入ってきて、心の優しさを知ると共に、その３ケ月だけなぜ休むのかいつか尋ねたいと思った。彼は暴走族のケツ持ち（暴走族の一団の一番後ろを走り、二人乗りで、鉄パイプを持ち、パトカーの追跡をじゃまする役。一番つかまりやすい役で、また、この役を全うしたものは出世頭となる）であった。

タカシは暴走族で出世した。彼はどうしてもバイクがほしくなった。彼は先輩に相談すると、「銀行や郵便局を狙え」という話になった。69 歳のおばあちゃん。郵便局から、２ケ月分の全ての生活費 18 万円を下ろして出てきた。そこへ二人乗りのオートバイ。後ろに載っていたタカシは、おばあちゃんのバッグをひったくった。おばあちゃんは必死で手を離さず、引きづられる。ガードレールに頭をぶつけて、４日後亡くなる。

次の日、顔を真っ青にしたタカシが登校。先生は「おまえがやったのか」と話しかける。素直にタカシはうなずく。「自分のやったことは自分でしまつしなければならない。どうする？」彼と先生は、病院へ向かった。ICU の前にぽつんと首をうなれだれて座っているおじいちゃん。彼は走り寄り、土下座して頭を下げた。頭を何ども床に叩きつけ、顔面から血を出した。でも謝り続けた。

罪を犯したら償わなければならない。死ぬのではなく、生きて償って、償って、償いきれなくても償って生きていかなければならない。彼は刑務所に３年入った。彼は今でも給料のほとんど全てをおじいちゃんに送り続けている。でもおじいちゃんからは手紙の一つ

の電話の一本もない。それでも彼は、一生償っていくと誓っている。
　先生は生徒をしかったことがないという。なぐったこともない。笑顔を見ていたいという。子どもは花の種である。育てれば必ず花が咲く。もし、花が枯れたら植えた人が悪い。子どもを大人の犠牲者になってしまってほしくない。たくさんの優しさの中で子どもは育ってほしい。
　この事件の起こる一週間前、タカシは体育の先生を殴って歯を 2 本折った。これを聞きつけた先生は、タカシを生徒指導室に連れていく。「理由がないわけがない。」先生は、部屋に鍵をかけ、話すまで帰さないと行った。やがて、深夜になり、彼は泣き出した。「先生、俺の背中見てくれ。」と T シャツを脱いだ。背中中に、タバコの火をつけられた火傷の跡。「俺は、これをみんなの前に見せたくなかった。だから、俺は、先生に、『プール掃除でも、何でもするから、プールに入るのだけはできないことを許してくれ。』って頼んだんだ。でも先生は見学でも、『水着にならなければ許さない。』ってつっぱねたんだ。」って泣き崩れた。先生は「体育の先生も俺の仲間だから、きっとわかってくれるよ。まかせておけ。」とタカシを自分の家に連れて帰った。彼の事件はそんな矢先だったと、先生は悔しがる。

マサフミ
　一見してシンナーを吸っていると思われる新入生がフラフラしながら入学式にやって来る。校門で指導していた先生は、「入学おめでとう。」と彼に声をかける。先生、「そのシンナーくさいんじゃ、入学式に出れないな。」彼は、「じゃあ帰る。」「だめだ、今『入学おめでとう』と言ったじゃないか。」彼は、先生が生徒指導室に連れて行く間に 42 枚の窓ガラスを割った。物は金で直せる。だから気の済むまでやらせた。生徒指導室で落ち着いた彼の前に「警察にするか。親に連絡するか。」彼は「警察はいやだ。」「じゃあ、家だな。」夜の１０時を過ぎて先生はマサフミを家に送って行った。６畳一間のアパート。母一人、子一人の生活。母は近くの洋裁工場で働き、細々と家計をやりくりしている。部屋には何にもない。
　マサフミは小学校の頃、学級委員もやったが、いじめられていた。友達のうちへも誘われたことがあったが、全て断った。友達の家に遊びに行ったら、今度は自分の家にも誘わなければならないからである。
　小学校 5 年の８月、母が病に伏してしまった。収入は途絶えた。大家は家賃の請求に来る。何度も居留守を使う。ガス、電気は止められる。
　困った時は、どうするか。学校の先生に相談しなさい。学校の先生は、家のこと、身体のこと、心の病気のことを見てくれる。必要があれば、相談に乗ってくれるし、児童相談所、警察、病院、家庭裁判所などとの窓口にもなってくれる。学校の先生は必ず、君達を守ってくれる。妊娠して男に捨てられた。そんな時も「死ぬ」なんて考えないで、市役所へ行け。児童福祉事務所に連絡して、ちゃんと生きていけるように相談に乗るし、金もでるのだから。

人間は食べないと生きていけない。マサフミは賞味期限が切れるコンビニの弁当をもらおうとした。自分の家から一駅ほど離れたコンビニのおにいちゃんに頼んだが断られる。次の店のパートのおばさんにも断られる。コンビニを回ること１０軒目。その店のおやじさん、「捨てる弁当は午前２時に取りに来るんだ。袋に入れてこの車の荷台に置いておくから、15 分ぐらい前に取りにくるといいよ。」と言ってくれた。ありがたかった。マサフミはその日から夜中の１２時を過ぎてから１時間以上歩き、毎日毎日その店へ通った。警察に見つからないように、時間をじっと電信柱の陰で待っていた。考え方によっては警察につかまった方が幸せだったのかもしれない。

マサフミは給食のおばさんを騙してパンと牛乳をもらったこともあった。「おばさん、公園で犬を３匹内緒で飼っているんだ。あまったパンとか牛乳とかあったらちょうだい。」給食のおばさんは、マサフミの言葉を聞いて、「犬にやるんだったら、食べかけのパンとかでもいいね。」と毎日パン、牛乳ももらって帰った。

そんな生活が８ケ月続いた。それに気づいたのはいじめっ子であった。その日は、児童がいつもより多く休んだからといって、新品のパンと牛乳をきれいに袋に入れてもらった。校門の前でいじめっ子達に囲まれ、「どこに犬がいるんだ」と言われ、無理やり公園に連れて行かれ、新品のパンを足でぐじゃぐじゃにされた。彼は泣かなかった。歯をくいしばって耐えた。彼は踏まれたパンを拾い集め、アパートの隣の部屋のおばさんのところへ行った。「おばさん、ガスと砂糖貸して。お母さんがよくなったら必ず返すから。」かれは、フライパンで、パンを形良く戻しながら砂糖を掛けてフレンチトーストを作った。「お母さん、フレンチトーストだよ。本当のフレンチトーストは卵が入っているんだ。いつか卵の入ったフレンチトーストを食べさせてあげるからね。」お母さんは泣いた。

そんな生活を助けてくれたのが、暴力団であった。彼は小学校６年生から暴走族に入り、浜連のマメといわれるようになった。母は暴力団だった父とダブってしまう。心の傷を薬物で癒してしまった。暴力団は必ず薬物とつながっている。全ての薬物を持っている。小学校６年から中学校３年までシンナーの生活だった。

そんな事情を知った先生は、マサフミを自分の家に連れて帰る。3、4 日経って落ち着いたら、「俺、母ちゃんとこに帰る。」と言うので家に帰した。何日かでシンナーを吸ってしまい、また先生のところへ戻ってくる。そんなことの繰り返しの日々が続いたある日、「先生、俺、先生のとこじゃシンナー止められない。日本でこの病気を治す病院が３つあるんだってさ。先生、俺、連れていってくれよ。」来週月曜日に連れていくと約束して、先生は、その日は、警察と合同の夜のパトロールがあると嘘をマサフミについて帰してしまったのである。「先生、気をつけて行ってこいよ。」それがマサフミの最後の言葉となってしまった。マサフミはそれから４時間後、ダンプカーに自ら突っ込んで即死してしまった。ダンプのライトが自分を呼んでいるように見えたのだろうか。

先生は、マサフミがまた家に帰ったらシンナーをやるのをわかっていて帰してしまったことを今でも悔やんでいる。

公民館での通夜。まだ身体はシンナー臭かった。300 台のバイクが追悼暴走ということで公民館に集結した。総長が母に挨拶をしようとしたが母は取り合わない。その総長も先生の教え子で、息子に「修」と名づけたそうだ。メンバーはみな、花束を公民館前に一列にきれいに並べた。先生は総長に言って全てのバイクを押して帰させた。公民館前にずらっと並んだ花束。お母さんは、その花束を一つ一つ踏み潰していった。先生は朝までかかって、それを掃除した。

夜が明けて、お母さんが先生に一緒に火葬場へ行ってもらえるように頼んだ。箸渡しといって、お骨を箸から箸で渡すのに二人必要だという。ステンレスの台の上で一時間弱でマサフミは骨になった。一番大きな大腿骨を拾おうとしたが、崩れて箸で持ち上げることができない。シンナーは人を２度殺す。一度目は命を２度めは骨までも。先生と母は両手で骨をかき集め、骨箱へ入れた。見かねた火葬場職員がほうきとちりとりを貸してくれた。一つ残らず、骨を拾い集めた。

タバコであっても、簡単には止められない。愛の力を持ってもである。ましてや薬物は、愛の力で治るものではない。病気はやはり医者に任せた方がいいと先生は思った。

薬物の特徴は次の２つ

１．やるとやめられない。依存性があること。

２．やると警察につかまる。日本は先進国の中では一番刑が重い国である。

薬物を売っている人が「俺を見てみ。ピンピンしてるぜ。」というかもしれない。でも薬が切れた時はどうなるか。使っているときは最高の快感が持てる。でも本当の幸せは努力しないで手に入るはずがない。薬物には２つの顔がある。

１．天使の顔、ほほえんで、いやなことを忘れる。

２．死神の顔　使えばやめられなくなる。人を３度殺すことになる。

①心の死　意欲、気力、やる気、優しさ、思いやりを失う。

②頭の死　脳がやられてしまう。薬物を使っている人がいたら逃げろ。辞めるようアドバイスしても無駄だ。どうしても助けたければ、先生に連絡しろ。

③肉体の死　少年院や刑務所に入れれば幸せ。国のお金で３食食える。中ぐらいの幸せは精神病院、そして、土の中に戻ることになる。

薬物を使うと、２，３ケ月でイライラするようになる。７、８ケ月で神経症になり、①被害妄想になる。その人の後ろに不用意に立ったりすると刃物でさされたりする。②幻聴が聞こえ、ある子はおばあちゃんの「しねー、しねー」という声が聞こえ続け、自分でドライバーで耳に突き刺した。脳まで達する寸前であった。幻覚も起こり、目の前で虫がとんでいるのが見えるようになる。　函館の本町、美原でも薬物の売買は行われており、その値段はかなり高く、また品質は悪い。

薬物を勧める友達を断るコツ。

１．話題を変えること。オリンピックのこと、野球のこと次から次へとこちらから話を出し、薬物の話題に反応しないこと。

２．「お母さんにおこられる。」とひたすらいい続ける。
３．３D 作戦、「だって」、「でも」、「どうして」をゆっくり１０分間言い続ける。
４．逃げなさい。道の明るい方へ、広い方へ、人のいる方へ、

アイ
2 年前 18 歳でこの世を去ったアイ。
彼女との出会いは彼女が中３の時。母からの相談である。家に戻らないという連絡で先生は彼女の家で待つ。夜中の２時過ぎ、ルーズソックス（都会ではかっぺ（田舎）くつ下）姿で帰る。シンナー３ケ月で、アイの脳はだんだん壊されていった。人間の脳は二度と再生できない。病院へ連れて行ったところ、脳の８％が縮んだ状態だという。80 歳の脳である。彼女は「私にかまわないで。」と言う。「私は雑巾なの。」雑巾とは、夜の街に出て、男達に好きに遊ばれて、自由にされて、捨てられる状態である。
　微熱が続いた彼女は診断の結果 HIV に感染していた。家の中で彼女専用の洗濯機が買われたり、お風呂を最後にされるなどされた。HIV はそんなことでは感染することはない。ついに彼女は８ケ月にわたっての家出をすることになる。
　トラックの運転手に声をかけては、「私の体をあげるから、どこかに連れていって。」彼女はそうして、男達に感染させ、復讐しようとしたのである。彼女は２つの間違いをした。一つは妊娠のことを考えなかったこと。もう一つは HIV ウィルスが一種類の場合は生きれるかもしれないが、二種類以上だと戦えないことである。
　８ケ月でやっと家にもどり、先生と話し合いをして、一生懸命勉強すること、きちんと制服を着て学校へ行くことを誓った。また、卒業後は、先生の手伝いをすることも約束した。しかし、病気は確実に進行し、アイは入院した。50 キロあった体重は 20 キロになり、体中に斑点ができ、目だけギョロギョロの骸骨に近い状態になって、先生は会いにいくのも忍びなかった。そんな状態でしらばく病院へいけなかったが、アイがどうしても先生に会いたいとのことで病院へ行った。「先生、頼みがあるの。先生、私のこと講演で必ず話して。体売って、私のような生き方をする人がいなくなるように。昼の世界で生きて。こんなこと先生にしか頼めない。」先生はうなずいた。７月に入り、病院から彼女はもう長くないと連絡が入り、かねて約束していた朝日を一緒に見るという約束を果たすため、前夜から病院へ入った。高校の制服を着て、体中の斑点は塗りつぶして、ピンクの口紅をつけて、精一杯のおしゃれをして、車椅子で外へ出た。先生、両親、姉に抱きしめられながら、ずっと泣いていた。朝８時に病院へもどり、痛み止めのモルヒネが注射された。彼女は若さゆえそれでも持ちこたえ、モルヒネ中毒（血管に虫がはいるような幻覚）になりながらも１０月に息を引き取った。彼女を殺したのは、自分達大人だと先生は自分を責めた。
　薬物の穴は特別な穴ではない。どこにでもある穴である。夜の街には来るな。私は 22 人の生徒を殺してしまった。花の種は昼の世界でないと咲くことはできないのだ。

えがおとあいさつと

5 年前ある中学校で講演した。最後の質問で、「先生、どうやったら笑顔があふれる街になるんですか。」先生は、「町中で挨拶や声かけをしていったらそうなる。」と答えた。それから、３クラスでの挨拶競争が始まった。校長先生が、優勝したクラスにラーメンをご馳走するなどといったちょっとした悪乗りもあって、町中に挨拶の輪が広がった。5 月にその学校の校長先生から、先生のもとに手紙が届いた。「私は７２歳のばあちゃんです。１０年前に連れ合いを失いました。それからずっといつお迎えが来るかと待っていました。ところが最近生徒達が声をかけてくれるようになりました。孫をもった気分になりました。」お年寄りの心に花が咲いたのである。「私は今年、花の種を植えました。それが大きくなったら、生徒達のもとに届けようと思って楽しみにしています。」とつづられていた。人間っていいもんだなあと思いました。優しさは昼の世界でだしなさい。心がきれいになるから。